

没後 300 年記念 はなぶさいつちょう 英一蝶 —風流才子、浮世を写す—

サントリー美術館（赤坂・東京ミッドタウン） 24.09.18～11.10

「英一蝶」(1652～1724) は、元禄時期(1688～1704)に活躍をした江戸の風流画人で、その闊達明朗な陽気で当時の江戸の人々に愛されたばかりでなく、幕末期に至るまでの長い間、常に江戸人の自慢の種として親しまれつづけた。



英一蝶 《布晒舞図》 17～18 世紀

長い晒に操って踊る舞人を主に据え描く作品は、晒を天衣のように軽やかに空中に浮遊させ続けるためには激しい腕の動きが必要であり、背後の音曲師たちは急テンポの伴奏をしているのだろう。

画面からは、賑やかな雰囲気がある。

英一蝶 《吉原風俗図巻（部分）》

本展は、没後 300 年を記念した過去最大規模の催事で、『雑画帖』三十六図全てが出品され、一蝶展では初めてというユーモア溢れる戯画から狩野派絵師としての高い技量を示す作品まで幅は広い。



井上和雄編『浮世絵師伝』によれば、「一蝶」は若年時に「狩野安信」の門に入って画技を学び、後古土佐の風格を慕い、岩佐又兵衛や菱川師宣などの画風を取り入れて一流派を目指し「風俗画」に取り組んだ。また、俳諧を「松尾芭蕉」、書を「佐々木玄龍」に学ぶなど絵以外にも多才であったようである。

《釈迦十六善神図》 18 世紀・江戸時代

近年発見されたばかりの現存する画伯の作品としては珍しい仏画で、本邦では初公開とされている。

《琴棋書画図屏風》 18 世紀 江戸時代 右・左双

「琴棋書画」という古典的な題材をアレンジした豪華な屏風の一品である。(写真略)

その他の出品

《田園風俗図屏風》

《雑画帖より睡猫図

《雑画帖より龍図》など

「没後 300 年 過去最大規模の回顧展」の紹介記事

朝日新聞 24.09.17

